

仕事をもつ女性が増えている現在、「女性の自立と子育て」は重要なテーマである。古い固定観念で女性を家庭に縛り、子育てをせねばならないとする制約に対し、女性の社会進出や個として生きる自由を力強く推進する動きは、今や国際的潮流である。私も仕事をもつ身であり、その意義を否定はしないが、子育てがあるために女性の自立が阻まれるという社会的力学とは別の次元で、このテーマを追求しようと思っている。つまり精神医学的立場から、子どもの精神発達や人格形成における母子関係を中心課題に据え、「女性であり人間であること」と「母であること」のジレンマに目を向けているのである。

ボウルビィは maternal deprivation(母性剝奪)という概念を1951年に提起した。人生早期に母と別れることは、乳児が最も必要としている母性的養育を奪い取られることになり、子どもの精神的健康が損なわれる危険性があるという指摘である。つまり母が家庭に居て子どもの養育にとりくむべきという示唆でもある。

しかしその後の研究は、当初の母の在・不在を重視する一元論的理論から、種々の心理的要因やメカニズムを加味した質的母性性に着目するとらえ方へと移ってきている。が、いずれにせよ、生後数年間の子どもの魂がひたすら母性を求めていることは疑いようもない。したがってその時期の母親は、子どもをわが手で育てたいという母性性と、仕事をしたいという個の独立性のはざままで、揺れ動かざるを得ない。否、

簡単に割り切って解決するにはあまりに重要な課題である。このジレンマの中で揺れ動き悩むところに母子のつながりが深まるチャンスがあり、真の母子関係が育つと私は考えている。

乳幼児期の母子関係の重要性については、多くの優れた概念が提出されている。ボウルビィの「愛着」、クラウスとケネルの「母子結合」、エリクソンの「基本的信頼感」等で、これらはいずれも、人生早期の母子間の体験を通して、母子がお互いにかけてえのない相手であることを発見し、お互いの存在により深い安らぎと信頼感を培うことの意義を提言している。したがってすべての母親は、仕事があろうとなかろうと、幼きわが子との間に豊かで深い絆をいかにして結ぶか、真剣に考えるべきである。

たとえば、まなざしによる絆。母はわが子を胸に抱いて授乳をしながら、万感の思いをこめて一心に赤ん坊を見つめる。すると乳児もひとしきり飲んでひと休みしながら、母の方を見上げ瞳に見入る。目と目の出会いは大切である。八木重吉は、「ゆうぐれ／瞳をひらけば／ふるさとの母うえもまた／とおくひとみをひらきたまいて／かわゆきものよと／いたもうここちするなり」と詩った。何と安らぎに満ちた母子の絆であることか。一日の終わりや人生の夕暮れに、人はふと瞳を開く。外にではなく内に向けて。その時ふるさとの母の瞳、幼き日の母の瞳が自分に向かって開かれ、かわゆきものよと語りかけてくれる……幼き日の母子の絆が一生の支えになることを忘れてはならない。